

◆連載-Vol.30

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948年神奈川県生まれ。1971年千葉大学建築学科卒業、『住宅特集』『新建築』編集長を経て1994年からフリー編集者。1999年～2014年千葉大学客員教授。

モダニズムの向こうへ その4

菊竹清訓 メタポリズムから自由な建築へ

1950年に早稲田大学を卒業し、竹中工務店、村野・森建築設計事務所を経て1953年に独立。いまでは考えられないスピードである。まあ、現在と当時では建築家の役割がかなり違っている。ある程度の実務経験は必須条件であり、建設現場では設計事務所に入ったばかりのスタッフでも現場の職人や施主からは「先生」と呼ばれていた時代である。

とはいえ「先生」には蔑称的なニュアンスもあり、面倒くさそうなヤツは誰でも先生と呼んでおけという風潮で、「先生と呼ばれるほどの馬鹿じゃなし」という川柳もあった。もちろん政治家先生もこの中に入っていたが、それは今でも変わらないようだ。そんな時代に、実務経験3年で独立したのは何とも大変なことであっただろう。あるいは実務よりも思考することに重点を置いた結果だったのかもしれない。

「か・かた・かたち」という明快な三題断として建築の原理を言語化したのが菊竹であった。「か」は思考や原理など形になる前の段階であり、「かた」は「か」を具体的な形式や法則に置き換えること、そして「かたち」はそれらの最終形としての具体的な建築としてとらえた。菊竹が設計作業を通じて重ねてきたこの考察は1969年に『建築代謝論 か・かた・かたち』としてまとめられ、彰国社から刊行された。

そこで菊竹が目指したものは、機能主義を超える方法論であったはずだ。もちろん、このタイトルからもわかるように、菊竹は同年の槇文彦とともにメタポリズムグループ(煩わしいの「メタボグループ」と略記してしまいたいのだが、若い読者

には「デブの団体」かと誤解されては困るので、あえてフルスペルで書く。蛇足だが、大学の講評会で「団塊の世代」を「集まることが好きな世代」と思い込んで発表した学生がいた。同世代の教員たち数人は一瞬呆然、その後口を揃えて「違う」と叫んだ)の一員であった。一般的にメタポリズムという黒川紀章の専売特許のように思われているが、黒川はもっとも若手の一員であった。

ここまでは経歴的な話だが、実作品としてまず挙げなければならないのは1958年に発表した自宅「スカイハウス」であろう。崖地に4枚の壁柱を立て、その上に2層の住居がある。上階が居間で3方が開かれ、日本では古典的な無双の雨戸が設けられていて心地よい空間となっている。ピロティ下は増築予定のスペースであった。私は菊竹に案内されて拝見したが、そのときはすでにピロティ部分には予定通り増築されていた。完成当時は「掃き溜めに鶴」と評した人もいたようだが、そのような凜々しさはなくて残念だったが、確実に代謝建築、メタポリズムを体現していた。

菊竹の代表作として必ず挙げられるのが「出雲大社庁の舎」(1963)。保存運動にもかかわらず、昨年解体されてしまったのは悔やまれるが、出雲地方の稲掛けをモチーフにし、プレキャストコンクリートを利用した重量感ある構成が、出雲大社本殿脇に、大地から湧き出したように置かれていた。プレキャストは解体も容易で、メタポリズムの発想からであろうが、そこにこの地方の伝統的な風景を埋め込んだ菊竹の姿勢は、単純なモダニストではないことを示している。

「東光園」(1964)の建築形態が「スカイハウス」の延長上にあるのは、まさに。「か・かた・かたち」の連続的な思考「か

たち」化そのものであろう。これをルイス・サリバンの「形態は機能に従う」という言葉に対する批評ととらえてもいいのではないだろうか。これもその後増築されており、発表当時とは外観が異なっている。

本来的に言えば、メタポリズム理論としては理解できるのだが、私個人としては、完成時の形にもっとも惹かれてしまうのはなぜだろうか。

それはともかく、菊竹が1958年の『国際建築』誌上で提案した「塔状都市」は1970年の「エキスポタワー」に、「海上都市」(1959、1960)は75年に沖縄海洋博での「アクアポリス」へと結びつき、いずれも環境との共生や自立的な自己増殖の可能性を含めていた。建築を無機質な構築物としてではなく、常に変化する生命体としてとらえたからこそ、メタポリズム＝代謝建築論へと展開したのである。

もちろん、菊竹作品の作品はすべてメタポリズムとは言わないまでも、どこかに動きを感じさせるもの、建築を軽く見せようとしたものなど、モダニズムから自由になろうという意志が強く働いていたように思う。

自身の出身地である福岡県久留米市に建てられた「徳雲寺納骨堂」(1965)は、結界を表す池の中に両妻側から階段で上がる高さ1.2mの床スラブを設け、そのスラブを抱え込むように屋根から両脇の壁が吊られている。壁の下端は床スラブより30cm高くされ、正面のアイレベルからは躯体が宙に浮いているように見える。これらが2枚の壁柱によって構造的に支持されているのだ。

開いたり閉じたりする扇をモチーフとした「都城市民会館」(1966)、橋梁ブリッジをデザイン化した「佐渡グランドホテル」

(1967)を土木萌えの走りと言っては失礼だろう。「島根県立図書館」(1968)のキャットウォークの床スラブの断面にはテーパーが付けられていてエッジが薄く見えるように処理されている。この設計には伊東豊雄が関わっていたようだ。

青森県黒石市の「黒石ほるが子ども館」(1975)や島根県松江市の「田部美術館」(1979)などはコンパクトながら内部空間はダイナミックで、それでいて居心地が良い。

ダイナミックなスケールという意味では1992年の「江戸東京博物館」だろう。東京・両国の国技館の脇に建てられ、巨大なピロティは防災拠点として機能する。などなど、ひとつひとつ取り上げたらきりが無い。

菊竹清訓の発想から具体的な建築に結びつく過程を篠原一男と比較した話を、あるOGから聞いたことがあった。曰く、初めの発想にこだわるのは篠原かと思いきや、菊竹であったという。作家志向の篠原ならばこだわるのはわかる。力尽くでも初めの発想を形にしそうである。実務的な面も強かった菊竹こそ、実現へのプロセスでさまざまに変容していくのではないかと想像する。ところが実は逆であった、というのは興味深い話であった。

また、ビデオカメラが一般化した途端に手に入れ、常駐するスタッフが撮影したテープを再生しながら確認した。「ところが、肝心なところが写ってないんですね。わかっているのに隠しているのかな」とは菊竹の口から直に聞いた話である。

菊竹清訓の門下からは内井昭蔵、仙田満、伊東豊雄、長谷川逸子、富永謙、内藤廣など錚々たるメンバーが排出しているが、これも一筋縄ではいかない人たち。いずれ彼らについても書くことになるだろう。(続く)



出雲大社庁の舎 出典：建築バース.com



徳雲寺納骨堂 photo by Kenta Mabuchi



都城市民会館 出典：ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



江戸東京博物館 出典：ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)